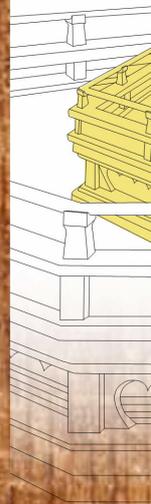


東大寺法華堂 八角二重須弥壇部材の年輪年代調査

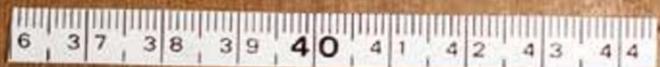
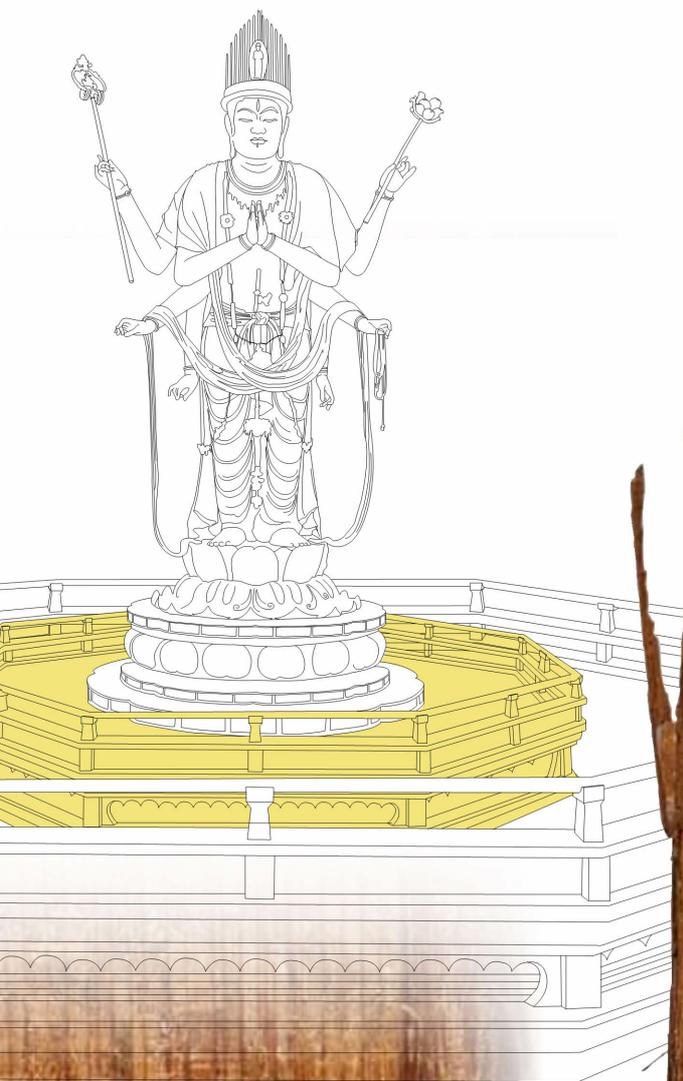
東大寺法華堂では現在八角二重須弥壇（右線画）の解体修理がおこなわれています。これを機に、奈良文化財研究所では須弥壇部材の年輪年代を調査しました。

今回ご紹介するのは上中棧と呼ばれる上段（線画中の着色部分）を構成する部材の一つです。この材は幅10cmほどで253層の年輪を含み、もっとも狭い年輪幅は髪の毛よりも細い0.06mmとたいへん目のつんだ良材です。そのため計測には苦労をともしましたが、西暦729年の年輪年代が得られました。樹皮が残存することから、この年代は材の伐採年を示します。これまで須弥壇と壇上に立つ不空絹索観音菩薩像の制作年代は8世紀半ばと考えられてきました。これを20年ほどさかのぼる今回の調査結果は、東大寺の複雑な成立過程を解き明かす新たな鍵となるかもしれません。（埋蔵文化財センター 児島 大輔）



年輪拡大写真（一目盛りは1ミリ）





上中棧部材 (原寸大)